

夏月

やり水になかるゝ影をなかむれば秋かどを思ふ夏の夜の月

全評、涼意宛然

螢

うち群れて飛ひかふ螢心あれやよるゝ文の窓てらすなり

夏月

敵やり火のけふりきえゆく中空のさゆれば明るみしか夜の月

溪月

やまかつも渡りかねつるたに川の淀のそこひに月影そすむ

晝寝の夢

中内蝶二

面壁三年の趣は知られど、晝寝半日の味は忘れがたし。一千九十五夕日の坐禪、悟り得し處幾何ぞ。六時間の夢、うつゝに感ぜしわが詩情は、白紙を汚すこと日に一丈。

蜀魂 歸去來をうたふ男あり

片足は舟にのこりてはとよきす

牡丹とは奢の外のをぞりかな

わか門に笛の音やみぬ夏の月

夏の月寝るを苦にしてわかれけり

結ふ手に松風通ふ清水かな

濁にも染まぬはちすの匂ひかな  
寝とびれてのみの數よむ旅寝かな  
松風のたえぬ坐敷や竹ふじん  
飼猫に夢やぶられぬ竹婦人  
古池に水のうごかぬあつさかな  
暑き日や兒等は 大の字 十文字

俳句九首

梓 水 川

夕立や風呂にかぶせる破傘  
蜘蛛盲壁より筆に巢を張れり  
川どしは日の照りぬけり蔭涼し  
卵の花に月の出けり岸のふね  
梅檀と桐の葉どしに朝日かな  
螢とて葉どしの星を卯月闇  
つるべ汲む袂に鳴くや雨蛙  
雨暗し螢の獨りどこにとふ  
年とれば花より夏の木蔭かな

登山

一路羊腸坂行吟 綠葉間 朝雲粧媚態 暮雨洗孱顔 松影千秋水 鶯聲四月山 回頭人世遠

烟圃 山内正 瞭